

## 研究ノート

# 子どもの世界を広げる絵本 — 附属図書館における活動をとおして —

○国広勝代\*1 藤本夏美\*2

キーワード：子ども、絵本、体験、親子、図書館

### 1 はじめに

幼児教育における“環境による教育”が明示されて久しい。環境という定義の中には、自然、文化、人、物だけにとどまらず、関係や雰囲気等多様な視点からの「もの」や「こと」が含まれている。

現代社会における心身の発達のアンバランスは、社会をゆるがす子どもたちの事件に見ることができるように、子どもたちが今よい環境にあるとは言い難い。

子どもの心の育ちを考える時、児童文化財がその役割の一端を担っていることは確かであろう。

『「たましい」をきたえる。」「すてきな“たましい”の存在を知る。』子どもの本は、その役割をいくらかなりと果たせる。』と河合隼雄は語っている。

ここでは環境としての絵本とその内容に基づく体験が子どもたちの世界を広げていく活動について述べることとする。

### 2 子どもと絵本

絵本のある環境により、何が育つかを考えてみるとまず、言葉であったり、心であったりする。

人間が人間であることの最大の特徴として言葉を持ち、その言葉によって物事を認識し、考え、コミュニケーションをとっていることである。

そのことから考えても、子どもが言葉を獲得していく時期の絵本という環境（存在）が大変重要になってくる。

保育所において0歳児から5歳児まで、十数年にわたって絵本の読み聞かせを続けた実践をもとに書かれ

た『絵本で育つ子どものことば』という本によれば、次のような子どもの姿があるという。

言葉獲得以前の0歳児にも絵本の言葉に耳をすます赤ちゃんの姿が見られ、言葉への期待、聞く力の育ちが見られる。

言葉を覚え始める1歳児は、イメージが言葉と結びつき始める頃で、絵本の読み聞かせによって象徴機能の豊かな育ちと想像力のめばえが見られた。

言葉の意味がわかり始める2歳児は、すべてのものに名前があることを知り言葉が育つ頃で、命名機能と虚構の世界が始まる。

言葉で対話を深めていく3歳児は、思いを言葉にして伝える力が育ち始める頃で、目でとらえた事象を言葉というシンボルを使って表現する力の育ちが飛躍的に充実し、その思いを何とか相手に伝え、相手からも答えを期待する。そして、人と関わり、物と関わるが多ければ多いほど社会性が育っていく。

言葉でものを考え始める4歳児は、言葉を使って見えないものを見る力の育つ頃で、思考機能と想像力の育ちが見られる。

考えたことを言葉にしていく5歳児は、言葉によって自制する力が育つ頃で、行為の自己調整機能と自我の発見をしていく。

最近どの世界でも“質”が取りざたされる。保育界では都市部の待機児童の問題が表面化することが多いが、一番大切なのは保育の質である。子どもの心が豊かに育っていくためには、言葉と心を育てる絵本は欠

\*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

\*2 山口福祉文化大学 附属図書館

かせない環境の一つといえる。

学校教育において生きる力の育成が課題となり、職場では人事評価にEQ（心の知能指数）が問題となる今日、日本の子どもたちに必要な環境を用意し、大事な体験をさせるということを親も教師も真剣に考えなければならぬ。

### 3 絵本と学生

一般的には、大人になると絵本を手にとることが少なくなる。しかし、絵本を楽しむことができる大人になってほしいという願いをこめて、保育に関するいろいろな授業で絵本を取り上げ、保育内容「言葉」の授業では絵本50冊を読んで一冊ずつレポートすることを課題としている。

児童文化サークルでも様々な活動を続けている。

平成21年度には「accototoの絵本の世界」をテーマに、地域の未就学児親子を対象に福田氏の絵本読み聞かせ、大判用紙での共同絵画を体験することができた。

平成22年度は「絵本の世界を体験しよう」と題して「ぐりとぐら」「あおくんときいろちゃん」「だるまちゃん」とてんぐちゃん」「ばばあちゃんのおもちつき」の絵本を選び、読み聞かせと絵本の世界を様々な活動に展開していく試みを行った。

これらの活動を通して、読み聞かせの難しさ、子ども一人ひとりの感性と表現の違いに気づいたという。今後も子どもと絵本の関わりを楽しみ、子どもの反応を観察しながら、絵本のすばらしさを実感していこう。

### 4 児童文化サークルを中心とした絵本の活動

【平成21年度】

活動名：accototoの絵本の世界

活動日時：平成21年11月28日（土）

10：00～11：30、13：30～15：15

活動場所：山口福祉文化大学附属図書館

目的：絵本作家と直接触れ合い、絵本を読んでもらったり一緒に絵を描いたりすることにより、絵本に対する子どもの感性を養う。

講師：ふくだとしお（accototo）

募集対象：萩市、萩市近隣市町村の幼児～小学校低学年児童

参加者：子ども34人、大人31人

内容：児童文化サークルメンバーやふくださんによる読み聞かせの後、6つのグループに分かれて、みんなで一緒に大きな紙に絵を描く。

（学生の感想・反省）

発足して2年目の児童文化サークルとしては、初めてのイベントとなったが、以前から子ども生活学領域の授業として、子ども向けイベントの企画運営などを体験していたため、今回のイベントも円滑にすすめることができた。

講師であるふくださんが、クレヨンを使い実際に絵を描いてくださったことは、子どもたちに良い刺激となったようだ。クレヨンを何本かまとめて持って描く技法を、すぐに真似ている子どももいた。

（参加者の感想）

「楽しかった。」「また参加したい。」「学生の活動にふれることができてよかった。」「これを機に、家でも本を読んであげたい。」等の感想が寄せられた。

イベント後、附属図書館内の絵本コーナーを利用する親子連れが増え、地域の方に大学を知っていただく良い機会にもなった。



写真1 accototoの絵本の世界

【平成22年度】

活動名：絵本の世界を体験しよう

活動場所：山口福祉文化大学

目的：絵本の中に出てくる物を作ったり、手に取ったり、食べたり、遊んだりして、絵本と現実の世界の楽しさを実感する。

募集対象：萩市、萩市近隣市町村の幼児及び小学生

第1回 絵本名「ぐりとぐら」

作：中川李枝子 絵：大村百合子 福音館書店

テーマ：かすてらってどんなにおい？

活動日時：平成22年6月12日（土）

13：00～16：00

参加者：子ども26人、大人25人

内容：児童文化サークルメンバーによる絵本の読み聞かせ後、「ぐりとぐら」に出てくるかすてらを実際につくって、その過程でおいしそうなおいがすることを体験し、出来上がったかすてらをみんなで食べる。



写真2 かすてらってどんなにおい？

第2回 絵本名「あおくときいろちゃん」

作：レオ・レオーニ 至光社

テーマ：光がまじる 色がまじる

活動日時：平成22年8月7日（土）

13：00～16：00

参加者：子ども24人、大人20人

内容：児童文化サークルメンバーによる読み聞かせ後、

4つのコーナーに分かれて、色の混ざり方を様々な方法で体験する。



写真3 「色みず」



写真4 「色めがね」



写真5 「マーブリング」





写真6 「光」

第3回 絵本名「だるまちゃんとてんぐちゃん」  
作・絵：加古里子 福音館書店

テーマ：ぼくもわたしもつくれるよ  
活動日時：平成22年9月11日（土）

13：00～16：00

参加者：子ども19人、大人11人

内容：児童文化サークルメンバーによる読み聞かせ後、「ぼうし」「げた」「うちわ」「はな」の4コーナーに分かれ、だるまちゃんのようにてんぐちゃんになりきるための道具を作る。



写真7 「げた」



写真8 だるまちゃんとてんぐちゃん

第4回 絵本名「ばばあちゃんのおもちつき」  
作：さとうわきこ 福音館書店

テーマ：ぺったんぺったんぱくぱく

活動日時：平成22年12月11日（土）

13：00～16：00

参加者：子ども38人、大人31人

内容：児童文化サークルメンバーによる読み聞かせ後、石うすと杵を使ってもちつきをし、ばばあちゃんのように様々な食材と一緒にもちを食べる。

食材として用意したもの：きなこ、あんこ、砂糖醤油、大根おろし、抹茶、くるみだれ、ごまだれ、ココア、チョコレート、グミ、黒糖、砕いたポテトチップ、砕いたポップコーン、砕いたクッキー



写真9 おもちつき



写真10 試食会



写真11 読み聞かせの様子

(参加者の感想)

「日頃、家ではできない遊びができ、子どもがとても喜んでいました。」「親もあまり経験したことのない活動が多く、一緒になって楽しむことができました。」「親子で触れ合いながら作り上げていくことで、お互いの情緒の安定につながると感じた。」「次もまた参加したい。」等の感想が寄せられた。

また、第1回のかすてら作りでは「こんなに簡単にかすてらが出来るとは思ってもみなかった！」家でも子どもと一緒にぜひ作ってみたいのでと当日のレシピを求められ、急遽用意する場面もあった。

(指導者の感想・反省)

サークルによる企画イベント2年目は、年4回行うこととし、新しく加わったメンバーと新たな体制で取り組んだ。

1年生は入学してすぐに企画運営を行わなければならず、戸惑うことも多かったはずだが、上級生が前年度の経験を活かしてアドバイスをしながら取り組んでいた。

読み聞かせをするのが初めての学生がほとんどの中、しっかり練習して本番に臨むことができていた。今後は、プログラムの組み立てまで学生のみで考えられるようになれば、サークルとしてより充実したものになると思う。

参加者は、前年度のイベントから続けて参加している親子も多く、大学で行う子ども向けイベントが定着してきたように思われる。次年度にどう続けていくかをしっかりと考えていきたい。

## 5 まとめ

本を読む前と読んだ後の自分が少し変わった感じは誰もが体験していると思う。絵本は、大人が読んでも楽しいし、教えられることが多い。従って、大人の間で大ブームになる絵本も少なくない。

現在、子どもと本との関わりについて多種多様な活動が展開されているが、『子どもの本として発刊される絵本は、自然の驚異や普遍的な人間社会の理を素朴に謳いあげる。空想する心や好奇心、冒険心を漲らせる力も持つ。美醜・喜怒哀楽も素直に語り描く。言葉に遊び、リズムや響きを楽しめるのも絵本の特徴だろう。絵本を自分の本とした大人が子どもたちに絵本を読み語る姿こそが、読み聞かせ・読み語り活動の本来の道筋ではないか・・・』と飴肥は述べている。

幼児期は周囲の語りかけで育つ。核家族に少子家庭、忙しすぎる大人たちが油断すると心に届く会話が極端に少ない家庭で子どもは育つことになる。

テレビやゲームにひとりで熱中させている家庭はないだろうか。

ここにこの活動の役割を見つけることができる。わが子といっしょに絵本の世界を楽しみ、ゆったりとした豊かな時間を共有する。

これらの積み重ねが双方向で語り合える力を身につけ、他に通じ合う能力を育むことになると信じている。

## 【参考文献】

- 1) 飴肥 紘；たましいをゆさぶる絵本の世界，NPO 法人「絵本で子育て」センター，2007
- 2) 徳永満理；絵本で育つ子どもの言葉，アリス館，2002